名古屋外国語大学論集　第12号　2023年2月

研究ノート

海外エアライン研修実施概要と研修効果

Summary of Airline Training Study and its Effect

今泉景子
Keiko IMAIZUMI

はじめに

本学のオープンキャンパスや推薦入試の面接で、高校生から入学後に参加をしてみたい研修として名があがるのが、「海外エアライン研修」である。これはエアライン業界を目指す学生へ向けてのサポート体制である「エアラインドリカムプラン」の1つで本学を志望する高校生や在学生に大変人気がある。

本稿ではその研修開始の経緯や概要をまとめ、参加学生のエアライン業界への就職率などを分析し研修効果を報告する。

1．研修概要

海外エアライン研修とは、客室乗務員（以下、CA）の正規訓練施設での訓練体験プログラムである。夏休みにマレーシアで実施をする研修「エアライン・トレーニング・スタディA」（以下、マレーシア研修）と春休みにオーストラリア・ブリスベンで実施をする「エアライン・トレーニング・スタディB」（以下、ブリスベン研修）の2種類がある。2022年度以降の新カリキュラムにおいては国際教養学科の専修科目、グローバルオンサイトプログラムとしても位置づけられており事前、事後研修を含め参加学生は2単位取得することができるようになっている。参加対象は全学部、全学科、全学年（ブリ

スベン研修は1～3年生）であり、卒業後の進路としてエアライン業界への就職を目指す者とし、原則としてTOEFL 470点以上、もしくはTOEIC 500点以上を応募資格としている。参加学生の選考から事前研修、研修の引率、事後研修までは国際教養学科のエアライン出身教員が担当している。また京都外国語大学（以下、京都外大）との共同実施である。

2. 研修導入経緯

先述の通り、マレーシア研修とブリスベン研修は京都外大の学生も参加をしている研修であるが、導入のきっかけとなったのは本学教員の濱嶋聡教授を通しての京都外大の教務課の職員からのブリスベン研修共同実施の提案であった。

当時日本航空（株）から本学教員として出向をしていた金沢和子名誉教授を中心に本学内で検討、調整が進められ、まずは試験的に本学内で参加者を募り2010年に第1回目を実施した。当時、研修先であるAviation Australiaには研修プログラムがなく、本学と意見交換をしながら、独自でカリキュラムを作成し、現行の研修プログラムが出来上がった。

本学内で2011年に研修が正式に開始され、参加費用は大学から補助がされるようになり、参加学生には単位認定をしている。

マレーシア研修については、同時期に本学の日本航空（株）出身の光岡寿之特任教授（当時）がマレーシア航空関係者に研修実施を打診し2011年度より開始、ブリスベン研修と同様に京都外大と共同実施をしている。

3. プログラム内容ならびに特徴

3.1 マレーシア研修

マレーシア研修は、マレーシア航空本社（クアラルンプール郊外のケラナジャヤ）にあるMAB Academyで行っている。MAB Academy（以下、アカデミー）はCAの訓練施設として使われており、新人訓練、定期訓練などが行われている。参加学生は敷地内にあるMAB Academy Hotel（2022年現在は閉鎖）へ宿泊しながら、研修を受講する。研修プログラムは実質6日間、平日

の9:00～17:30に行われ、大きく分けて英語プログラムとCA研修プログラムがある。英語プログラムではアカデミーの語学担当インストラクターが英語で行い、乗客との自然な会話を楽しむための言い回しや会話術を学ぶ、CA研修プログラムではメイクアップやヘアスタイリング、ホスピタリティの基礎、様々な乗客への対応、機内サービス、急病人発生時や機内火災時の対応訓練、緊急脱出訓練、着水時の救難訓練を行う。これらの訓練は専用施設が必要であり、実際に外部の者が使用し訓練体験することは日本国内では難しいため、学生にとっては大変貴重な機会となる。

マレーシア研修の最大の特徴はCA研修プログラムのインストラクターを現役の日本人CAが担当する点である。日本人CAインストラクターによる熱い想いを込めた指導を通して参加学生は仕事の魅力や大変さを体験を通して実感する。指導は日本語で行われることにはなるが、だからこそ日本人CAに求められることについて、ダイレクトに感じとることができる。

また多民族国家であるマレーシアに滞在することで、日本とは異なる宗教、生活文化、食文化に触れることができるのもマレーシア研修の特徴であ

表1：2019年度　マレーシア研修プログラム内容

1日目	2日目	3日目
英語プログラム	英語プログラム	CA研修プログラム
オリエンテーション 身だしなみ・挨拶 表情・言葉遣い 立ち居振る舞い 乗客への対応	挨拶と自己紹介 質問の仕方 熟語・言い回し 会話の弾ませ方	メイクアップ スタイリング

4日目	5日目	6日目
CA研修プログラム	CA研修プログラム	CA研修プログラム
急病人発生時の対応 機内火災時の対応 緊急脱出訓練 着水時の救難訓練	ヘアメイク 制服着用 機内サービス アナウンス練習	航空機基礎知識 修了式

（出典：研修資料より一部抜粋　筆者作成）

写真１：急病人発生時の対応

写真２：着水時の救難訓練

写真３：機内サービスの説明を受けている様子

写真４：制服着用での記念写真

※全て2019年度　マレーシア研修の様子

る。アカデミーの周辺にはイスラム教のモスクがあり、礼拝の時間にはコーランが聞こえてくる。アカデミー内でもヒジャブを着用した社員を目にすることも多い。マレーシアでは食事を1日5～6回に分けてとる習慣があり、マカンタイムと言われる午前と午後のティータイムは訓練中であっても必ずとる。時期によっては研修がラマダン月と重なることもあり、イスラム教に触れられ、理解を深められる貴重な機会となる。CAになるために必要な適性である異文化理解や多様性をマレーシアの地で学んでいく。

3.2　ブリスベン研修

ブリスベン研修は、オセアニア地域の航空会社が使用する正規訓練施設Aviation Australia（ブリスベン空港付近）で行う。Aviation Australia（以下、

AA）では、CAの訓練施設はもちろんのこと、操縦訓練用のシミュレーター、整備士育成のためのハンガー（格納庫を模した整備士育成のための施設）もある。定期訓練を受ける現役CAのほか、CAや整備士育成のための一般の研修コースを受講している学生とも触れ合うことができる。

参加学生はホームステイをし、AAまで30分～1時間ほどかけて各自電車やバスなどを使い通学をする。海外の地での公共交通機関の利用も参加学生にとっては現地の生活を体験する貴重な機会となる。研修プログラムは実質10日間、平日の9:00～15:00で行う。インストラクターはカンタス航空、エミレーツ航空など世界各国のエアライン出身の元CAが担当し、指導はすべて英語で行われる。研修は午前中、自己紹介スピーチから始まり、午後からのモックアップ（航空機の客室仕様を再現した模型）での訓練体験に備えた基礎知識、単語を座学で学び、参加学生が理解した上で無理なく研修を受けられるように配慮されている。研修内容はマレーシア研修とほぼ同様であるがそれに加え、シミュレーターの見学、操縦体験やハンガー（格納庫を模した整備士育成のための施設）の見学、外資系航空会社の受験を想定した面接練習やグループワークも行う内容であることが特徴である。

ブリスベン研修の最大の特徴は指導がすべて英語で行われることである。エアライン業界は専門用語が多いため、その用語を覚えることから始めるプ

表2：2019年度　ブリスベン研修プログラム内容

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
座学	オリエンテーション 自己紹介 身だしなみ	CAの歴史 出発前のブリーフィング 航空用語	乗客の出迎え 離陸後・フライト中の業務	航空機のドア取り扱い	セーフティ デモンストレーション練習
実践	ヘア&メイクアップ	モックアップ見学	モックアップでの ブリーフィング 機内安全点検	シミュレーター見学 航空機のドア操作	モックアップ内にて セーフティ デモンストレーション実践

	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
座学	緊急時の対応	クレーム、 理不尽な乗客への対応	機内食・ドリンクサービス	着陸準備 見送り	面接練習 グループワーク 修了式
実践	急病人発生時の対応 機内緊急時の対応 機内急減圧時の対応	ハンガー見学ツアー 脱出用スライド滑走	機内食・ドリンクサービス	着水時の救難訓練	

（出典：研修資料より一部抜粋　筆者作成）

ロセスは、まさに外資系航空会社での研修を体験しているかのようである。AAのインストラクターは経験豊富で常に明るく楽しく指導を行う。和やかな雰囲気で研修が進み、学生の笑顔が絶えない。これまでの乗務経験のエピソードなども多く聞くことができ、研修終了後も個人的に連絡を取り合う参加学生も多くいる。CAの仕事の厳しさというよりは、楽しさ、やりがいを参加学生は感じ取るように見受けられる。

研修中、参加学生はホームステイをしているため、研修終了後や週末はホストファミリーとともに長い時間を過ごすことになる。中には多様なバックグランドを持つファミリーもおり、ステイを通して更なる異文化を体験する

写真５：セーフティデモンストレーション練習風景

写真６：ハンガー見学ツアーの様子

写真７：スライド滑走

写真８：着水時の救難訓練の様子

※全て2019年度　ブリスベン研修の様子

ことになる。英語力向上はもちろんのこと、自分の意志をしっかりとファミリーに伝えることの大切さも学んでいく。

オーストラリアはワークライフバランス先進国ともいわれている。仕事とプライベートのバランスをうまくとっている人々の姿から、日本とは異なる働き方を参加学生が知る機会となり、それが今後の価値観に大きな影響を与えるようである。

4. 研修募集から事前研修までの流れ

4.1 研修募集

募集説明会は毎年マレーシア研修は6月頃、ブリスベン研修は10月頃にポータルサイトに案内を掲示し昼休み時間に行っている。担当教員からの挨拶、説明、研修を担当する旅行代理店担当者による研修内容の説明、参加経験者による体験談、事務室担当者からの応募方法、選考方法についての説明が行われる。学生は志望動機などを記入した参加申込書や必要な英語資格証明書や成績証明書などの必要書類を準備し応募をする。

4.2 選考

後日参加申込票、英語資格証明書、成績証明書をもとにエアライン担当教員を含む国際教養学科教員がグループ面接を行い、最終的に参加者を決定する。応募条件を満たしているかどうかはもちろんのこと、研修参加の目的、エアライン業界を目指す強い意志があるか、団体行動に必要な協調性があるかなども面接を通して確認していく。

多くの学生が入学前から研修のことは知っており、大学生活の中で参加する時期を早い機会に決めて応募しているように見受けられる。応募時の学年は選考には影響しないが、既に長期留学や就職活動を控えているようであれば、状況に応じて考慮をしていくようにしている。

応募理由として、マレーシア研修はエアラインの訓練施設で行うこと、ヘアメイクを整え、制服を着用することができることをあげる学生が多い。大学の広報においても、モックアップ（航空機の客室仕様を再現した模型）の

前で制服を着用しての写真を使用しているため、それが印象に残る学生が多いようである。ブリスベン研修は英語で実施される研修であること、ホームステイを経験できるなど、英語力向上を理由にする学生が多い。

4.3　事前研修

マレーシア研修、ブリスベン研修ともに旅行代理店による出発前オリエンテーションを含めた事前研修を4コマ行う。研修担当教員と参加学生の時間割を確認して実施の日時を決定するが、6限や土曜日の実施になることもある。いずれの研修も参加に際しての心構えの確認や研修中の目標設定、研修内容、スケジュールをはじめ、エアラインで使用する英語、専門用語を学ぶ。特にすべて英語で行われるブリスベン研修では、専門用語の事前学習が非常に重要になる。特に深いプールを使用した着水時の救難訓練やスライド滑走などの実地研修の場合は安全のため、インストラクターによる英語での注意事項をしっかりと理解することが重要であるため、事前学習が必須である。

また研修先の国や地域の歴史、地理、気候、文化や利用する航空会社、空港、観光先などについて3～4名のグループを組み、担当テーマについてまとめ、発表を行い、事前学習を行う。最後に参加学生には目標を2つ設定してもらい常に意識を高く持ち研修に取り組めるようにしている。

表3：2019年度　事前研修内容

	マレーシア研修	ブリスベン研修
事前研修①	参加者自己紹介 研修プログラム内容確認 Airline English	参加者自己紹介 研修プログラム確認 Airline English
事前研修②	事前学習発表 「クアラルンプール・マレーシアの歴史・地理」 「マラッカ・マレーシアの気候・文化」 「マレーシア航空・クアラルンプール国際空港」	事前学習発表 「CAの仕事」「日本航空」「カンタス航空」 「オーストラリア・ブリスベン＆シドニー」
事前研修③④	旅行代理店による出発前オリエンテーション 研修の個人目標確認 フライト記録の記入方法 前年度の研修参加学生による体験談＆質問 最終確認	旅行代理店による出発前オリエンテーション ホームステイについての内容確認 研修の個人目標確認 フライト記録の記入方法 前年度の研修参加学生による体験談＆質問 最終確認

（出典：事前研修資料より一部抜粋　筆者作成）

出発前の最後の事前研修では前年度の研修参加学生を招き体験談を聞く機会を設けている。生活面での疑問点、持ち物、所持金、服装に関する質問やホームステイ中の注意点なども参加経験者であれば的確に答えられるため、参加学生にとっては大変有意義な機会になっているように見受けられる。

5. 研修中の様子

両研修には研修担当教員が引率で同行をし、研修中のサポートを行っている。研修中も座学、実践ともに付き添い、研修プログラムが予定通り行われているかを確認し、参加学生が内容を理解していないように見受けられる場合は適宜補足をする。特にブリスベン研修では全て英語での指導のため、中にはついていけなくなる参加学生もいる。注意事項を聞き逃してしまうことで、怪我をしてしまう場合もあるため、特に慎重に行う。

研修プログラム以外で引率教員の対応が必要なケースがあり、マレーシア研修、ブリスベン研修ともに一定の傾向があるように思われる。マレーシア研修ではエアコンによる冷え、研修の疲れから体調不良になる参加学生がいる。マレーシアは機内を含め、建物内はかなりエアコンが効いているためである。また9:00～17:30の研修終了後は夕食を取りに近隣のモールへ出かけ、ほとんどの参加学生が門限の21時まで外出し、週末は市内観光とかなりのハードスケジュールになる。また水や食べ物が合わず体調不良となる場合もあるため、研修を休ませ、ホテルで休養させるケースもある。今後の対策としては、週末にある程度の自由時間を設けるなど、余裕をもったスケジュールを設定することも検討している。

ブリスベン研修では長時間のフライトの疲れが出てしまう参加学生も多いが、研修時間は15:00までと比較的スケジュールに余裕があるため、体調不良になることはそれほどない。多いのがホームステイ絡みの対応である。研修中にステイする家庭は、現地の日本人コーディネーターが慎重に調整をしているが、中には相性が合わない、ホストファミリーが留守がちになるなどでストレスを感じてしまう参加学生もいる。その場合はコーディネーターに確認を依頼し、状況に応じてステイ先を変更することもある。トラブルでは

ないが、参加学生によくある悩みが、自分の主張ができないということである。食事の量が多いが遠慮して残すことができない、嫌いなものを出されても「NO」と言えないため、無理をして食べて体調を崩してしまうというものである。ステイ先を変更するのではなく、「NO」と言えるようになることも勉強であると、アドバイスをすることも多くある。

研修中には怪我や事故など、大きなトラブルはないが、慣れた頃に携帯電話やポケットWiFiの忘れ物をしたり、中には出先で最終バスに乗り遅れて家に帰れないと引率教員に緊急連絡がくるケースもある。その場合は引率教員が現地のコーディネーターに連絡をして対応を依頼することもある。

6. 研修終了後

6.1 研修報告書、参加学生の感想

研修終了後の早い機会に提出をしてもらう。内容としては、研修を通して学んだこと、今後の大学生活、進路にフィードバックすること、研修の目標・取り組み・達成状況、事前研修内容について、その他の項目を設けている。

以下は2019年度実施のマレーシア研修、ブリスベン研修の参加学生が提出した報告書からの抜粋である。（原文ママ）

6.2 マレーシア研修　感想

大学入学前から客室乗務員に興味があり、この研修に行きたいという目的もあり名古屋外国語大学に進学し、1，2年では自分の英語力の低さにたくさん悔しい思いもしたけれど、今回3回生の夏の就職活動を目前に控えたこのタイミングでのこの研修の参加は自分にとってとても実りあるものになりました。去年1年の留学経験を経たことで、英語での授業にも自分の持っている100％の力で取り組むことができ、100％の体制で吸収し、学べたことが本当によかったです。進路に対し漠然とした気持ちで今を迎えてしまっていたけれど、揺らいでいた気持ちも今回のこの研修を経て、自分の意思を硬く固めることができました。

客室乗務員のキラキラした部分だけでなく、乗客としてでは目に見え

ない裏の大変で過酷で最も重要な保安要員としての仕事を目で見て実際に身に染みて経験したからこそ、この仕事の意義や、重要さを深く理解することができ、更に興味を持つことができました。

（グローバルビジネス学科　16生）

この研修で学んだことは、今までももちろん頭のどこかでは知っていたことだったけど、客室乗務員の仕事は、綺麗で楽しい面だけでなく、怖い面、汚い面、大変な面がたくさんあるということである。この10日間で客室乗務員のサービス要員としての役割・保安要員としての役割を初めて体験し、飲み物や食事を出すときもただ出すのではなく、一つ一つの行動に安全面・お客様へのおもてなしなどが配慮されていることを学んだ。また、この研修で1番印象的な訓練は保安要員としてのsafetyの訓練である。この訓練をする前に○○さん（研修先のインストラクター）から実際に起きてしまった事故の話を聞き、「事故は絶対に起きてはいけないことだけど起きます。」と言われ、すごく怖いと思ったし、訓練ですら緊張感が今まで感じたことのないものだった。これがもし実際に起きた場合、機内では自分にしかそれが出来ないことを認識し、少しでも自分やお客様の命を助けるためにあらゆることを想定した細かい訓練がされていることが分かった。

（国際教養学科　18生）

6.3　ブリスベン研修　感想

客室乗務員の役割は安全面が大部分を占めるのだと気づいた。またこの研修では、今まで知らなかった客室乗務員の仕事を学んだり、今までしたことのない体験を経験したりすることができた。例えば、非常口のドアの開け方や仕組みは知らなかったが、今ではドアを開けて、英語で乗客を誘導できるようになった。また、非常事態が起きたときにどうすべきかは飛行機に乗ったときに見るビデオや安全のしおりでしか見たことがなかった。しかし今回の研修では実際に酸素マスクがでてきたり、スライダーを使って下りてみたり、救命胴衣を着て水中に入り、救命

ボートで助けてもらったりした。これらは見るのも初めてで、加えて体験することもできたので、非常事態の雰囲気を味わえ、客室乗務員が冷静に判断し、はっきりと乗客に指示をして命を守らなければいけないことを学んだ。（現代英語学科　19生）

研修をするまで、基本的な知識しかなかったけれど、2週間という短い期間を通して、グルーミングをはじめ、サービス、緊急時の対応など客室乗務員としての役割について日本では学べない多くのことを学び、貴重な経験をすることができました。

学校だけではなく、ホームステイを通しても、オーストラリアの文化に触れ、現地の人たちと交流することができたことは、今後の大学生活で、私にとって大きな原動力となると思います。（国際教養学科　19生）

この研修を通して、客室乗務員の厳しさも楽しさも学ことができた。やはり客室乗務員になりたいと改めて思い、なぜなりたいのかを考え直すきっかけにもなった。この研修で共に学ことができた仲間や客室乗務員のことに関わらず様々なことを教えてくださった先生、オーストラリアでできた新しい家族に出会えたことが自分の中でとても大きいため大事にしていきたいと思う。また母国語ではないところで学ぶ苦しみを痛感し、今後の学習のモチベーションにしていきたいと思う。行きと帰りでカンタス航空と日本航空に乗れたことも、とても勉強になった。機内で実際の客室乗務員の方のサービスから学ぶことは多く、2週間の全ての時間が有意義であったと感じた。（現代英語学科　19生）

6.4　事後研修

研修終了後は事後研修を2コマ実施する。参加者へ研修内容に関連するテーマを割り当て、まとめのプレゼンテーションを英語で行い、学びのアウトプットを通して復習を行う。

研修担当教員が全ての研修に立ち合い、研修内容を把握し、参加学生の様

表4：2019年度　事後研修内容

	マレーシア研修	ブリスベン研修
事後研修 ①②	研修の振り返り、体験後に得た知識や感想など （事前研修の発表グループごと） 「マレーシア航空」「クアラルンプール」 「マレーシア」「クアラルンプール国際空港」 「客室乗務員の仕事」 個人目標の達成度確認	研修内容のテーマごとの振り返り（個人発表） 「航空英語」「ドア操作」「乗客対応」 「セーフティデモストレーション」「機内サービス」 「緊急時の対応」 「日本航空＆カンタス航空のサービス」など 個人目標の達成度確認

（出典：事後研修資料より一部抜粋　筆者作成）

子を見ているからこそ、その習得度や参加学生達の成長を事後研修で確認をすることができる。

7. 参加実績ならびに就職実績

2011年より実施をした研修の参加学生の一覧によると、2019年度実施までにマレーシア研修は88名、ブリスベン研修は100名参加している。

表5：研修参加学生のエアライン業界就職実績一覧

実施年度	マレーシア研修					ブリスベン研修				
	参加学生数	エアライン業界就職者数（新卒）			就職率	参加学生数	エアライン業界就職者数（新卒）			就職率
		CA	GS他	合計			CA	GS他	合計	
2011年度	15	7	4	11	73%	9	1	3	4	44%
2012年度	10	3	0	3	30%	9	3	3	6	66%
2013年度	9	4	2	6	66%	12	4	3	7	58%
2014年度	中止	—	—	—	—	11	4	4	8	72%
2015年度	5	3	0	3	60%	12	6	2	8	66%
2016年度	6	0	4	4	66%	12	6	2	8	66%
2017年度	15	8	2	10	66%	12	3	3	6	50%
2018年度	15	—	—	—	—	11	—	—	—	—
2019年度	13	—	—	—	—	12	—	—	—	—
2020年度	中止	—	—	—	—	中止	—	—	—	—
2021年度	中止	—	—	—	—	中止	—	—	—	—

※2014年度マレーシア研修は、航空機事故の影響を考慮し実施中止
　2020年度、2021年度は新型コロナウイルスの影響により実施中止

（出典：研修参加者データ、就職先データより筆者作成）

エアライン業界への就職を目指していることを応募条件の1つにしていることもあり、実際にCAやグランドスタッフ（GS）に就職をする参加学生が多いのが特徴である。表3は研修参加学生のエアライン業界への就職実績（新卒）をまとめたものである。（2018年度以降は新型コロナウイルスの影響によるエアライン業界の就職中止の影響、在学中の参加学生もいるため、実績は出していない。）

8. 研修効果

エアライン研修参加学生のエアライン業界への高い就職率は、研修実施の大きな効果といえる。研修担当教員として参加学生の様子を見ている中で感じる一番の要因は研修参加によるモチベーションアップである。

学部、学科、学年を超えて、同じ夢を目指す仲間と過ごす時間は参加学生にとってはかけがいのないものとなる。また学内でエアライン関連科目を履修しているだけでは得られない、現地での実践的な学びが大きく心に残るものになる。エアライン業界を目指す学生にとっては、訓練施設での体験は入社後の訓練の擬似体験となる。映像や写真でしか見たことのない施設へ踏み入れて過ごすことはそれだけで貴重な機会となる。研修を通してCAはもちろん、エアライン業界の仕事の厳しさ、責任感、そのやりがいを出会うインストラクターから学び取っていく。また研修を通して「CAになりたい自分」としっかりと向き合い、その思いを改めて確認していく。研修終了時はほとんどの参加学生が涙を流し、お世話になったインストラクターとの別れを惜しみ、今後の決意を新たにする。

また研修の引率を全日程担当教員が行っていることも、研修効果を与えていると考える。参加学生と長い時間を過ごすことによって、一人一人の人柄や特徴、適性を把握することができ、就職活動に対するアドバイスも学生自身のことをしっかりと理解した上で行うことができる。日々の大学生活の中では学生から相談を受けることが難しい状況ではあるが、研修中はあらゆるタイミングで参加学生とコミュニケーションを取ることができ、就職活動の相談を受けたり、教員自身の仕事の体験談などを伝える時間が取れることも

写真９：研修終了後インストラクターとの別れを惜しみ涙ぐむ参加学生

有意義なものとなると感じる。研修終了後、在学中はもちろん卒業後も就職活動の際には相談の連絡をしてくる参加学生も多く、研修中に築くことができた関係は研修効果の一つといえるだろう。

おわりに

本学には多くの海外研修プログラムがあるが、海外エアライン研修については入学前から研修参加を希望する学生が多い。それゆえ参加学生は高いモチベーションを持ち、研修中も1日1日全力で取り組んでいる。憧れの業界へ一歩踏み入れることのできる研修は、参加学生にとっては夢のような時間なのである。競争率が高い業界、職種であるがゆえ、海外エアライン研修での経験は参加学生にとって大きな支え、原動力となっていく。

エアライン業界への高い就職率を後押しする研修として長年行ってきたが、コロナ禍においては2020年度、2021年度の実施は中止となった。併せてエアライン業界の採用も厳しい状況になったが、少しずつ復活の兆しが見えてきている。本稿を執筆している2022年9月現在、2022年度のブリスベン研修は再開の予定で準備を進めている状況である。本稿では2019年度までの概要をまとめたが、今後状況に応じて内容を変更することもあると思われる。

最後に近年、海外エアライン研修導入に関わった教員の退任、エアライン

出身教員の異動も続く中、今一度研修について振り返りまとめることで、改めて想いを受け継ぎ、今後に繋げていくことができれば幸いである。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、海外エアライン研修導入の経緯などを2019年まで国際教養学科に在籍されていた金沢和子名誉教授に話を伺った。また現代国際学部事務室の石月さんには研修参加学生データ、キャリアサポートセンターの中島さんには研修参加学生の就職先データのご提供をいただいた。改めて感謝申し上げます。

参考資料

本稿では主にマレーシア研修、ブリスベン研修の関連資料を参考にした。また、写真並びに学生の感想は掲載許可確認済みである。

Aviation Australia [2022]「Study」https://aviationaustralia.aero/study/（閲覧日：2022年9月23日）

Malaysia airlines [2021]「MAB Academy」 https://www.malaysiaairlines.com/cn/en/commercial-services/mhbiz-travel/mab-academy.html（閲覧日：2022年9月23日）